

漢語近世音エクササイズ(2)

中村雅之

今回のテーマは m 韻尾と n 韻尾の見分け方である。「漢語近世音のはなし---(5) m 韻尾の消失」(『KOTONOHA』第 89 号、2010 年 4 月)に対応する。

【確認】

中古音の m 韻尾は 14 世紀までは北京音にも保存されていたが、15 世紀中頃までに全て n 韻尾に合流した。そのことは『洪武正韻訳訓』などの朝鮮資料から確認できる。m 韻尾が消失した結果、現代北京音からはどの字が m 韻尾を持っていたかは判別できない。日本漢字音でも同様で、現代日本語の読みではかつての -m と -n をともに「ン」で表記するため、一般には区別がつかない。

ただし、いくつかの場合には、日本漢字音と現代北京音によっても、ある字が 14 世紀以前に -m であったか -n であったかが峻別できることがある。

- (1) 慣用的な熟語の読み。「三位一体」「千手観音」
- (2) 地名や人名の読み。「奄美」「信濃」
- (3) 声符の利用。「感・減・喊」「今・吟・含」「根・恨・銀」
- (4) -u-介音。「官」「元」「君」

最初の「三位一体(サンミイタイ)」の例では、「三(サン)」と「位(イ)」の結合が「サンミ」となっているのは、「三」がもともと m 韻尾を持っていたことによる。「千手観音(センジュカンノン)」の場合には「観(カン)」と「音(オン)」の結合が「カンノン」になっており、「観」が n 韻尾であったことを知る。

(2) の場合、通常の漢字音では「奄(エン)」「信(シン)」であるが、地名や人名などの古い読み癖では「奄美(アマミ)」や「信濃(シナノ)」のように m 韻尾や n 韻尾に母音が付された形で「マ」「ナ」などとなることがある。

(3) は声符の利用であるが、一般に同じ声符を持つ字は同じ韻尾を持つ。もしも朝鮮語の「カムサハムニダ(感謝します)」という言葉を知っていれば、「感謝(カムサ)」の「感」が m 韻尾を持つことがわかるだけでなく、同時に「喊」を声符に持つ「減・喊・緘」もすべて m 韻尾を持つことがわかるのである。「今」が m 韻尾ならば、「吟・含」も m 韻尾であり、「根」が n 韻尾ならば、「恨・銀」も n 韻尾ということになる。

(4) は現代北京音の知識を利用したもの。一般に、-u-介音と m 韻尾は共起しない。したがって、「官(guan)」「元(yuan)」「君(jun)」のように -u-介音(ないし -ü-介音)を有する字はすべて n 韻尾ということになる。「観」は「観音」という熟語から n 韻尾であったことがわかるだけでなく、「観(guan)」という発音によってもやはり n 韻尾と知れるのである。

<練習問題>

【レベル1】14 世紀以前の韻尾が -m / -n のいずれであったか、日本漢字音を参考にして考えよ。

- ① 「讚」 ヒント: 讚岐
- ② 「因」 ヒント: 因幡・因縁
- ③ 「反」 ヒント: 反応
- ④ 「陰」 ヒント: 陰陽師
- ⑤ 「曇」 ヒント: 安曇野

【レベル2】14世紀以前の韻尾が-m/-nのいずれであったか、日本漢字音・-u-介音・声符などを参考にして考えよ

- ① 段
- ② 庵
- ③ 線
- ④ 近
- ⑤ 恩

【解答と解説】

【レベル1】

ヒントを見れば、答えはすぐにわかるはず。①「讚岐(サヌキ)」から「讚」は n 韻尾、②「因幡(イナバ)」「因縁(インネン)」から「因」は n 韻尾、③「反応(ハンノウ)」から「反」は n 韻尾、④「陰陽師(オンヨウジ)」から「陰」は m 韻尾(ちなみに声符は「今」である)、⑤「安曇野(アズミノ)」から「曇」は m 韻尾。地名の読みは一般の呉音・漢音の読みと音形が異なる場合があることに注意せよ。

【レベル2】

- ① 「段」は現代北京音「duan」で-u-介音をもつため、n 韻尾である。
- ② 「庵」は声符「奄」が m 韻尾であることから、同様に m 韻尾である。
- ③ 「線」は難問だが、声符の「泉」が「quan」で-u-介を持つことから、n 韻尾とわかる。
- ④ 「近」も難問だが、「近衛(コノエ)」という熟語に思い至れば n 韻尾とわかる。
- ⑤ 「恩」は二つの方法が可能。第一は声符「因」が n 韻尾であること、第二は熟語「恩愛」に「オンナイ」という読みもあること。いずれかに気づけば n 韻尾とわかる。

熟語の伝統的な読み癖には、「恩愛(オンナイ)」や「灯心(トウシミ)」のように現代ではあまり用いられなくなったものも多いが、漢語音韻史にとってはそれらも有益な材料となる。朝鮮語学習の機会があれば、「心理学(シムニハク)」という語を発音しながら、「灯心(トウシミ)」と比較しつつ「心」が m 韻尾であることを確認できる。また、「奄美」「讚岐」などの地名の読み癖も古い時代の体系の重要な生き証人ということになるのである。